

佳作

感動は、深まりを増して

兵庫県 小林聖心女子学院中学校二年 石川 愛子

私が、歌のボランティアを始めて、今年で四年になる。初めは、寝たきりになってしまった曾祖母をなんとか喜ばせたい、励ましたい。その一心だった。ところが、いつのまにかそんな音楽の和は、曾祖母が入所している特別養護老人施設の方々みんなに広がり、そこにおられる方々みんなと、歌を歌ったり、手遊びを一緒に楽しんだりするようになったのである。その施設は、私の住んでいる所からは少し遠くにあるので、私は長期の休みを利用してそこを訪れてきた。

今年の夏休みもまた、私にとつてとても楽しいな施設訪問の日がやってきた。そして今年、ちよつとしたサプライズを計画した。

というのも、私がクラシックバレエを習っている事を御存知の苑長先生から、

「今年は是非、歌の後にバレエも踊ってくれませんか。」

と、依頼されたのだ。私は、喜んでそのお話を承知した。けれども、入所しておられる方々にそれは内緒。

「みんなを、驚かせましょう。」

という事になった。

当日、私はいつものように「ふるさと」や「りんごの唄」を歌い、英語のあいさつ歌に合わせてみなさんと手を取り合い、楽しい時を過ごした。そして、一通りの歌が終わった後、苑長先生から、「ではここで、更に素敵なプレゼントをみなさまに。」

と、とあいさつしていただいて、私はバレエの衣装に着替えて登場した。すると、皆さんから「わあ、すごい！」とか「素敵ねえ。」などの嬉しい言葉をたくさんいただいた。私は、白鳥の湖と花のワルツの二曲を踊った。踊りは自分で振り付け

をしたので、大したことはないと思うのだが、それはそれは、とても大きな拍手をいただいた。そして花のワルツの時は、私も花を持って踊るので、みなさんにも一緒に楽しんでもらおうと、一本ずつお配りした。踊り始めると、みなさんも曲に合わせてゆらゆらと花を振ってください。まるでお花畑の中で踊っているようで、とても嬉しくなつた。

そして、お別れの時。私にとってはいつも一番辛い時。いつもいつも、待っていてくださるおばあさんは、花を握りしめ、目を真っ赤にしてこう言うてくださった。

「ありがとう。この花、私は宝物にします。また会える日まで、この花を見て思い出します。」

と。私は、感動で胸が熱くなった。

そしてこの時、感動とは深まりを増すものなのだと思いついた。四年も行き続けているからといって薄れるのではなく、むしろ、心のつながりが深くなればなる程、感動も深まりを増すのだ。私の心は、一瞬の感動ではなく、いつまでもずっと心を温めてくれる優しくも力強い感動で、今、満たされている。

